

令和7年度12月11日移動教育委員会・意見交換記録
(クリエート浜松51会議室)

○社会人から教員を目指すことについて

(参加者)

私は現在、社会人として働いているが、社会人から教員になるときに、現場の教員からどのようなことを求められているのか、また、新卒の教員と比較して、どのような点が注目されるのかうかがいたい。

(下鶴委員)

私が社会人の経験のある教員を迎えたときの感想だが、まず、新卒の教員と比較して、接遇の力がすぐれていると感じた。電話対応の仕方が一味異なる。保護者対応の柔らかさや、挨拶一つをとっても大変好感がもてる。これまで多様な人と交流してきた経験が強みとなっていると考える。その経験は学校組織内においても生かせるのではないかと思う。

(教育長)

私も同じように教員を務めてきたため、自分が校長として迎えるという点では、下鶴委員がおっしゃった通りである。同じ教員という立場で社会人出身者と接してきたときに、大学生から直接教員になった人とは異なるものの見方をする方がいると認識した。一つの見方しかできない教員集団では、子供が「その通りにならなければいけない。」というイメージを抱いてしまう。しかし、子供を別の角度から認めてくれる教員がいるというのは非常に重要なことであり、子供にとってそれはプラスになると考える。一方で、大学を卒業してすぐに教員になる方には、「子供と年齢が一番近い。」という強みがある。それは年齢を重ねた人には絶対に戻ってこない強みである。教員集団の中に様々な方がいるということが私は大事だと考える。

○浜松らしさ（浜松のよさや教育資源など）について

(参加者)

私はずっと浜松で育ってきたが、子供時代に受けてきた教育は、非常に意義深いものであったと感じている。浜松の「浜松らしさ」とは何だろうか。また、浜松が打ち出していくとしたらそれはどのようなものなのか。教育委員の皆様はどのように考えていらっしゃるのかうかがいたい。

(高木委員)

私は浜松出身ではないが、浜松に来てまず印象に残ったのは「やらまいか」の精神である。これほど大規模な都市でありながら、浜松まつりなど伝統的な文化をずっと継承している点に敬意を表する。

（下鶴委員）

浜松は海、川、山など自然が豊かであり、広大な面積を持つため、地域ごとに文化や伝統が異なる。それぞれの地域で学んできたことは「心のふるさと」として残り、「浜松ってやっぱりいいな。」という思いにつながる。このような感覚を幼少期に多く学ばせることが、「（大人になったら）故郷に戻って頑張ろう。」という思いにつながっているのではないかと考える。浜松市内に住んでいるとなかなか気づきにくいですが、一旦市外に出てみると浜松のよさにたくさん気づくのではないかなと思う。

（参加者）

大学院に通学するため他県に滞在しているが、月に1回程度の頻度で帰省している。自分が異なる文化圏に行き、少し寂しさを感じているが、浜松に帰省し家族や友人と話す中で、「やはり自分の故郷はこの場所であり、ここに帰ってきた。」と思える土地である。そのような意味において、私は浜松が大好きである。

（教育長）

皆さんはどちらの出身であるか。

（参加者）

私は他県出身である。浜松は祭りが盛んで素晴らしいと思う。

（参加者）

浜松は楽器などの産業や伝統文化が栄えており、市民が皆温かいという印象がある。そのような温かい地元で働きたいという思いがある。

（参加者）

私は、小学校のときにアクト大ホールで聴いたオーケストラの演奏が強く印象に残っている。実際に音楽に触れて、地域でもたくさん音楽に関わる経験をしたことが、自分がピアノを始めるきっかけにもなった。そのような経験を子供たちに届けたいという思いで、浜松で教員を務めたいと考える。

（参加者）

私は大学までずっと他県に住んでいた。浜松に来て最初に感じたのは、市民がのんびりしていることである。また、私の住んでいた県と比較して交通マナーが素晴らしいと思う。車を運転していても、横断歩道などで停止したときに子供・大人問わず礼をしながら渡ったり、駐車場で他の車が道を譲ってくれたりなど、私が住んでいた県では考えられない。私の親が浜松に来たときも「浜松の人たちは本当に礼儀正しいね。」と話しており、私も心の底からそう思う。また、私の地元は、祭りなどが中止になってしまうほど地元愛が希薄な地域のため、浜松市民の祭りにかける思いは非常に強いと思う。浜松では、出身の町に相当なアイデンティティを感じていらっしゃる方がいることに驚いた。

（参加者）

私は浜松生まれ浜松育ちである。浜松のよさといえば断然浜松まつりであると思って
いる。小学生の頃から祭りに参加し始めて以来、欠席したことはなく、現在も祭りだけ
が生きがいであるというほど好きである。現在では役員として参加させていただいてい
る。浜松のよさであると考えが、近年は参加人数や規模の縮小を顕著に感じている。
地元の子供会もなくなりつつあるため、教員になったら浜松まつりのよさや資源を可能
な限り教育に取り入れ、自分が感じる浜松のよさをより子供たちに共有したいと思う。

（参加者）

私も、生まれも育ちも浜松市である。浜松市は海も山もある点がよいと考える。

（田中委員）

私は高校まで他の地方で過ごしていた。その地方はとてもよい場所であり大好きであ
る。今でも好きであるが、主人も子供も浜松で育ったため、私も浜松が大好きになった。
特に、子供たちが小中学校でとてもよい教育を受けてきた。今、教員を目指している方々
が、浜松の魅力を子供たちに伝え、子供たちが浜松を好きになれば、その保護者も浜松
を好きになる。そのような教育を推進していただければと期待しながら聞いていた。

（鈴木委員）

私も浜松市民であるが、祭りにはあまり関心がない。祭りが好きな人ばかりではなく、
嫌いな人もいる。古くからの町は誇りを持っているが、新参の町もあり、全く関わって
いない町も多数存在する。

（教育長）

浜松市は市町村合併を経ているため、旧浜松市のみが浜松市ではない。多様な考え方
が存在する。赴任した学校が、浜松まつりとは全く関係のない学校になる可能性もある。
そのような点も含め、浜松は人や環境が多様である。浜松市は多様性を大事にするとい
う方針を打ち出しているため、学校教育においても多様性を重視している。第4次教育
総合計画を見てくださいという方もいると思うが、その中心に「多様性・包摂性」とい
う言葉が示されているのはこのためである。

○外国籍の児童生徒について

（高木委員）

多様性・包摂性という言葉聞いて思い出したが、浜松の外国籍の生徒の多さには非
常に驚いた。浜松市民にとってはそれが当たり前になっているため、他都市から来られ
た方は驚いているのではないかと。他都市の方と学校現場に行った際に「こんなにいるの
か。」とおっしゃるが、その光景が当たり前になってきている自身がいることを嬉しく感
じている。私はすでに多様性・包摂性の中に入っているが、外部からはそう見えるのか
もしれない。浜松市の小学校や中学校には、多様な価値観の受容や「みんな違ってみん

ない」という考え方が自然に存在すると考える。ポルトガル、フィリピン、パキスタンなど、多様な国籍の児童生徒がいることから、子供たちは実に豊かな国際的な環境で育っているのではないかと推察する。

（参加者）

外国籍の子供たちは、日本語はどの程度話せるのか。保護者よりも子供の方が話せるのか。

（教育長）

日本語を全く話せずに来日する子供たちもいる。しかし、子供たちは常に学校で日本語の中にいるため、いずれは保護者よりも話せるようになる。子供が通訳として保護者に同行する場合もある。浜松は外国籍の子供に対する支援も非常に手厚い。

（下鶴委員）

週1回程度、外国籍の子供の取り出し指導を所属校外で行っている。

（田中委員）

日本語教育について、事務局の方から説明をいただくのはいかがだろうか。

（教職員課採用管理担当課長）

初期日本語指導教室という教室がある。浜北教室と江南教室の2教室が設置されており、日本語が初期段階の子供たちに対し、指導員が適切に配置され、少人数で指導してある。拠点となる学校に集まり、日本語習得のために非常に手厚い指導が行われている。

（教育長）

初めて日本に来た子供たちに10週間指導を行う。日常生活で用いる言葉程度は理解できるようになった上で、自身の居住地区の小学校や中学校に通学するようになる。

（下鶴委員）

非常に手厚い適応指導から始まっている。

○水泳指導について

（参加者）

私には今、一つの問いがある。それは、「本物に触れる」とはどういうことかということである。水泳指導に関する研究をしており、近年、小学校の水泳運動が外部に委託されていくという流れの中で、教育の役割や専門性が専門的ではなくなるのではないかと考えている。例えば、スイミングスクールで指導をしている人たちを「本物」と捉えるのか、それとも「本物を知っている人」に触れると捉えるのか。これは教員の専門性に関わる問題の一つであると考えている。他県では、すでにプールの授業自体が廃止され

たり、プールの心得のみを実施したりする授業形態になっていると聞いている。私が教員として浜松に戻るとしても、プール指導だけでなく、何を「本物」として教え、子供たちに享受していくのかという問いを抱き続ける。先生方にご意見をいただけるとありがたい。

（教育長）

水泳の授業に関することのみで言えば、浜松は水泳の授業は廃止されないので、安心していただきたい。水泳の授業ではなくプール施設そのものをどのように維持していくかという問題はある。そのような点を考慮し、外部委託を徐々に進めていくことはあるが、海がこれほど近い地域において水泳そのものは必要であるとする。浜松独自の取組として 30 分間回泳という活動があり、教育委員会が進めている活動ではないが、そのようなものを大切にしてきた土壌がある。

（高木委員）

社会科は事例が多いように感じる。社会科における「本物に触れる」ということについては、漠然とイメージができる。例えば、火縄銃など「もの」としてのイメージがある。体育科においてもそのような考えがあるのか。

（参加者）

次期学習指導要領の保健体育科の論点整理では、「学びの実装」と記載されており、体育科の水泳に関しても「学びの実装」はあるだろうと考えている。自分の中で 25m 泳ぐということは、「浮心と重心のバランス遊び」であると捉えている。例えば、体を丸めて浮く「だるま浮き」が最も浮きやすいが、そこから徐々に手足を伸ばしていくと沈んでいく。その浮く状態と沈む状態のバランスで「遊び」をしていると捉えさせたい。25m をクロールで泳げなかったとしても、「バランス遊び」で遊べていたら、「クロールに触れている」、「本物に触れている」と捉えられるのではないかと考える。他の教科においても、「本物とは何なのか」ということについて、教員や学生の皆さん、一般の方々がどのように考えているのかうかがいたい。

（下鶴委員）

体育の系統性では、水遊びという基本の運動の中でたくさん体を動かし、感覚を学ばせることで水泳につなげていく。この基本を徹底することが、水中での体の動作につながると思う。

（高木委員）

本物ではない体育とはどのようなものを指すのか。

(参加者)

大学時代にスイミングスクールでアルバイトをしていた。子供たちにクロールの泳ぎ方を教えていると、練習が足りないこともあると思うが、そもそも何もない状態で浮くことができない。そのため、沈んでしまったり、呼吸をする際に水を飲んだりして苦しくなるという状況になる。これは、本物の体育ではないと私は主張したい。なぜなら「泳ぐこと」「泳げること」が目的になっているからである。泳げるようになるという結果は同じでも、その中で水に浮く感覚や水中での肌の感覚などと対話をしてほしい。泳ぎ方だけを知っていても、それは体育ではないと考えている。

(参加者)

私は、安心安全と健康を最優先に考慮した上で、生徒が様々な種類の泳法を習得できれば、それは素晴らしいことであり、これからの生きていく力につながると思う。もちろん、水の感触や肌で感じるものも大切であると思う。

(参加者)

水を楽しむための最低限の手段として「泳げる」ということがあるのではないかと考える。もしかすると、その過程に「楽しさ」は不要ではないかと思う。極端な例かもしれないが、箸の持ち方を練習しようとしたときに、楽しんで箸を持てるよう指導していると考えていると、いつまでも食事をするという動作が習得できないままになってしまうのではないかと考えてしまう。最低限やらなければならないことと、それをやった上で楽しめることとは区別されるべきではないかと考える。

(参加者)

「楽しい」という部分も含めて教員の力量なのではないか。

(下鶴委員)

体育は「生涯にわたって豊かなスポーツライフを目指す」ものであるため、その根底にある基礎的部分を指導すればよいのではないかと思う。

(教育長)

プロのサッカー選手全員が指導が上手であるかという点、そうではないのと同様である。「楽しい」を引き出しているとは限らない。校長として小中一貫校で小学校の教員を見たとき、中学生は能力的にある程度完成しており、これ以上落とさない、あるいは子供の特定の技能を伸ばすにはどうすべきかを考えるのに対し、小学校はそうではない。6歳で、まだ未熟な子供たちを相手に、6年間積み上げていかなければいけない小学校の教員は、本当に素晴らしいと感じた。「できる」「できない」ではなく、「楽しい」「楽しくない」も含め、何か記憶に残る45分の授業を構築できる小学校の教員の心構えに対し、非常に尊敬の念を抱いた。中学の教員にはない視点であると感じたことがあった。6歳から義務教育が始まり15歳までの間に、参加者の皆さんが考えているようなことも育っていくと考える。最初から本物を教え込むことは、適切ではないのかもしれない。

（下鶴委員）

体育においても楽しさの質の追求という要素があり、「楽しさを知る」、「好きになる」、「得意になる」という段階があると考え。それが生涯体育スポーツの中の位置づけである。生涯体育スポーツの中では、学校体育だけでなく生涯に渡ってスポーツライフを楽しみ豊かにしていくことが言われている。したがって、教育長がおっしゃった通り、幼少期には「水って楽しい」、「怖くない」、「友達と水かけ遊びをするのがこんなに楽しい」と感じてもらうことが大切である。まず、嫌いにさせてはならないと思う。

（高木委員）

順番にこだわる必要はない。私は語学が得意であり、英語で話してとりあえず通じたという喜びから始まり、ある時、適切に話したいという意識に至る。TP0に応じた適切な伝え方がしたいと思ったときに、英語に対する感覚が変わるのではないかと考えている。どちらを本物というのかはわからないが、基礎と応用を循環しながら、更なる向上を目指したときに、本物に気付けるのではないかと考える。これは、フェーズの違いであると捉えた。

（参加者）

知識を教え込みたいわけではなく、自分自身が「浮心と重心のバランス遊び」のような視点を持ち、子供に指導するか否かで全く異なると感じている。水泳が専門であるため水泳指導について話せるが、他の教科を指導する際に、「学びの偽装」になってしまうのではないかという危惧があり、不安を感じている。

（田中委員）

保護者の立場からの発言となるが、ひとくくりに子供といっても多様なレベルの子供がいる。水泳を一つとっても、全く泳げない子もいれば、スイミングスクールで通っていてすでに泳げる子もいる。全く泳げない子で「浮くことまでできるようになってよかった。」と思える子もいれば、ある程度泳げる子でもっと泳ぎたい子もいる。また、泳ぎが苦手なため指導してあげたいと思う子もいる。そのような子供たちのすべてのレベルに寄り添うことが教育だと思っている。どれが本物かといえば、すべて本物である。教員が指導してくれる内容はすべて本物であり、ある程度の技能がある上で楽しさを教えるのも一つの手段である。子供が30人、35人いた場合、その全員の気持ちに寄り添う教員であってほしいと願う。子供が学校から帰ってきて、今まで全くできなかったことが、「先生が教えてくれたからできるようになった。」と言ったときに、保護者として非常にありがたいという気持ちになる。そのような保護者の気持ちも大切にしていきたい。

○学級経営のコツと指導について

（参加者）

教育実習に行った際に、学級経営が上手な教員の学級に入らせていただいた。その様子を見て、私にはこれほど優れた学級経営はできないかもしれないと感じた。学級経営

をするときのコツはあるか。また、先生方はどのように学級経営をされていたのかがいたい。

（教育長）

この出席者の中で、教員は下鶴委員と私のみである。他の方は学校の教員ではないため、学級経営の経験はないが、どのような学級経営をする教員がよいと考えるか話していただきたい。

（田中委員）

質問となるが、素晴らしい教員がいて、その教員の特定の点が優れていると感じたのか。もしそうであれば、それを盗んでもらえばよいと考える。私の職場は職員が30人程度だが、いろいろな方がいる。どの社会も同じであるが、中には、本当に困ると思われる人もいるのは確かである。そのような人を見て、「このような接し方を子供やその保護者にはしない。」ということを読んでほしい。よい教員からは、よいと思えることを盗んでほしい。「よいと思うことを全く同じように」という意味ではなく、自分で適切に消化し自分なりの方法を見つけるという強い思いを持ってほしい。そのような教員との出会いが必ず職場にはある。それが社会で生きていく上での秘訣である。

（参加者）

私も様々な職種で働きながら感じることもある。浜松市ではないが、生徒に対する言葉遣いについて「こいつ」と言ったり、呼び捨てにしたりなど若い層にその傾向が強く、それについては思うところがある。悪態をつかれることもあるが、生徒を尊重してほしいと願う。共に働く仲間ではあるが、低次元な言動に染まらないよう注意しなければならないと感じる。

（田中委員）

出席者の中にも社会に出て働く経験をされている方がおり、そのような経験はあるのではないか。少なからず各々が社会の中でたくましく成長していく。新卒で今後採用される教員も、不安なことが多く大変であると思うが、職場には必ず素晴らしい教員がいるため、そのような教員から多くを吸収し、よい教員になってほしいと願う。

（下鶴委員）

学級経営については心配なことが多いと思う。しかし、学級づくりが成功する特効薬はない。子供たちとの信頼関係を日々積み重ねることが大切である。私が校長時代には、当時の職員に「信頼の貯金を大切にしてください。」と伝えた。朝の会だけではなく、授業でも1日の中でたくさん信頼の貯金をする。この貯金は困ったときに本当に助けになる。信頼を築くポイントは、やはり子供をよくみること。観察と承認、そして適切なタイミングで褒めてあげることである。子供は元来、信頼されることについて、「自分を理解してくれる人」「自分を認めてくれる人」というように捉える。自分に寄り添ってくれそうな人に信頼を置くものだと思う。

（参加者）

私が関わってきた浜松市の教員は、全員優しく、適切に子供たちと向き合っていた。私は他県出身であるが、教員になった際に、そのような環境に順応し、適切な対応ができるか非常に不安である。心掛けた方がよいことはあるか。

（教育長）

心掛けているのとは少し違うが、自分の若い頃を振り返ると、自分なりに「この子はこうなるとよい。」と考える一方で、「この子はこうなりたいと思っていないのかもしれない。」という疑いを抱いていた。この子が「どうなりたいのか」、そして私がこの子に「こうなってほしい」ということを、日々の触れ合いの中で、対話をしたり、態度で示したりして分かり合っていく。最初から子供のことを100%受け入れることも大事ではあるが、それだけではその子が望ましい方向に成長していかない可能性が出てきてしまう。私は中学校の教員であったため、中学校3年間の中で、社会に出る際に身につけるべきものを含めて共に作り上げていくことが大切であると思う。

（高木委員）

皆さんの話をうかがっていると、最初から立派な教員にならなければと考えているのだと感じた。どのような職業でも、その職業に就いてから職業人として成長していくのであれば、最初は失敗してもよいのではないか。失敗しても1年目は許される。「どうしよう」、「助けて」という場面があってもよいと思う。皆さんがこれまで接してきた、生徒指導や学級経営が素晴らしい教員は、新しく教員になった初日からそうであったわけではないと思う。「そのうちに自分が素晴らしい教員になっていくのだ。」と考え、様々なことに挑戦していく過程で、自分なりの正解やスタンスが見つかると思っていた方が精神的に楽ではないかと思う。

（参加者）

私は、小学生の頃から小学校の教員に憧れていたが、勉強が苦手だったため諦めてしまっていた。しかし、「子供と関わりたい」という思いを捨てきれず、幼稚園の教員を目指していた時期もあった。幼稚園や保育士の勉強ができる高校に通学したが、本当にやりたいことは何かと考えたときに、幼稚園の教員は違うのではないかと感じた。そのタイミングで、自身の小学校高学年時の担任教員と縁があり、「小学校の先生に向いていると思うよ。」という言葉をいただいた。幼稚園の勉強もしてきたため、幼稚園と小学校の連携やサポートができる教員になりたいと思った。インターンシップで小学校1年生の教室に入ったときに、子供たちは皆落ち着きがなく、その子たちをまとめるのは難しいということを実感し、自信がなくなった。個性がある子供たちをまとめていくためには、どのようなサポートが必要なのかということを知りたい。

（教育長）

浜松市では、幼稚園から小学校に入学するにあたり、一つの小学校に、非常に多くの幼稚園、保育園、こども園等から子供たちが入学する。入学前に新入生の全ての情報

を交換することは難しいが、小学校 1 年生では、入学後にスタートカリキュラムというものがあり、少しでもなだらかに小学校生活に入っていけるよう配慮している。幼稚園では幼稚園で身につけさせたい力があるため、幼児期にしっかりと身につけさせたい力を小学校でも引き継ぐという方法をとっている。教員 1 人で対応するわけではなく、学年や支援員等、学校の教職員全員で小学校 1 年生の子供たちを見て育てていくつもりで受け入れる。小学校時代の担任教員が「先生に向いているよ。」と言ってくれたのは、子供の気持ちを理解した上で、チームで連携して取り組んでいくことができる人だと評価してくれたのだと思う。心配はいらない。

（参加者）

私は小学校 2 年生の教室で教育実習を行った。その中で、給食指導をどのようにすべきかわからなかった。教員がどのように行動しているか意識しながら給食を食べたことがなかった。子供たちの食に対して、先生が「美味しい。」と食べる以外に、どのように向き合っていけばよいのか漠然としているため、アドバイス等あればうかがいたい。

（教職員課職員）

例えば、教員が食べる姿勢を示すことや、子供たちと楽しく給食を食べるという環境づくりを通して、子供たちに少しずつ苦手なことに挑戦させたり、ルールを守らせたりすることができるようになると考える。まずは、そのような環境づくりが重要であると感じている。

（参加者）

教育実習のときに、担当教員の「褒めること」を中心とした指導が、私の中で印象に残っている。その教員は、学級づくりが一番大切であると話しており、私も褒めることを中心とした学級づくりを進めていきたいと考える。年度初めの最初の 1 週間が学級づくりにおいて方向性を決めていく最も大切な時期であると聞いているため、自分なりに意欲的に取り組みたいという気持ちと、いろいろな教員に自ら声を掛け、助言を得たいという気持ちがある。最初の 1 週間でクラスを確立していくために、自身が頑張った方がよいことや、子供たちと関わる上で意識した方がよいことがあったら助言をいただきたい。

（下鶴委員）

学級づくりの一環として、ルールや約束事を作ることが大切である。最初は教員が主導することが多いかもしれないが、徐々に子供たちに任せるようにしていく。3 学期になったら、自分たちで決まり事や約束事を作っていけるような学級にしていく。最初はある程度、教員が主導で「こうしようね。」というようなことを作ってもよいかもしれないが、徐々に子供たちと話し合っ作っていくようにする。それが子供たちの成長につながる。集団をまとめるコツは、話を聞くことができる子供を育てることである。話を無駄に長くせず、明確にポイントを絞って話をし、それを繰り返していくことが大切である。

○まとめ

(教育長)

ますます浜松市の教員になりたいと思ってくださっただろうか。ある教育者の言葉で、「一番はもちろん尊い。しかし、一番よりも尊いビリだってある。」という言葉がある。「一番よりも尊いビリだってある」ということを真剣に考えている人が教員をやっていると思う。教育とは、そういうことである。一番を作る、一番の子供を育てることが教育ではない。順番を付けなければいけないときもあるかもしれないが、それぞれの子供のどこにその子の「自分らしさ」を認めていくかという点を大事にしているのが浜松の教育である。皆さんは、ご自身の「自分らしさ」を大切にしながら、学生なら学生時代を過ごし、働いている方はその仕事を行い、そして浜松の教員になっていただけたらと思う。教員という仕事は、大変で苦しいこともたくさんあるが、それも含めて面白い。一緒に浜松の教員を楽しめたら嬉しいと思う。